

トゥーゲントハット邸

グレタとフリッツ・トゥゲンダート夫妻のヴィラは、1928年から1929年に建築家ルートヴィヒ・ミース・ファン・デル・ローエによって設計されました。それは建築構造、革新的な空間配置、インテリアデザイン、技術的設備、および自然環境への組み込みにおいてユニークな芸術作品です。トゥゲンダート邸は、おそらく十字の平面上に柱の形で鋼構造が私邸に初めて使用された家の一つです。内部では、モロッコのオニキス、イタリアのトラバーチン、および東南アジアの木材など、貴重な素材が使用されています。リリー・ライヒ、セルギウス・リューゲンベルク、マルゲータ・ミュレロヴァーがデザインに協力しました。温風冷暖房、電動窓降ろし、入り口の光電池など、技術的な設備も優れていました。

自立型の3階建ての別荘は、傾斜地に配置され、居住空間は南西に向けられています。最上階の3階のみで構成された通りの間口は、入り口の乳白色のガラスの曲線の壁とテラスへの通路が目立っています。テラスへの通路は、ブルノのパノラマを見ることができるよう巧妙に縁取られ、住居部分とスタッフ用の部分を分離しています。建築面積は907㎡で、メインのリビングエリアの面積は237㎡です。

建築家

グレタ・トゥーゲントハット (旧姓レーブ・ペーア、1903年5月16日ブルノ〜1970年12月10日ザンクト・ガレン) とフリッツ・トゥーゲントハット (1895年10月10日ブルノ〜1958年3月22日ザンクト・ガレン) の夫婦は、ドイツ語を話すユダヤ人のテキスタイル産業家および商人の家系に生まれました。グレタの父、アルフレッド・レーヴ＝ペールは、1929年3月に娘に彼の別荘の敷地内にある特別な建築用地を寄贈しました。この建築用地は、ブルノの歴史的なパノラマを見渡す素晴らしい景色を提供していました。ミースは1928年9月にブルノに到着し、その建築用地の場所とブルノの優れた建築の水準に感銘を受け、その仕事を受け入れました。洗練されたクライアントは彼のビジョンを尊重し、財政的制約は重要な役割を果たしませんでした。建設は1929年の半ばに開始され、家は1930年12月1日に完了しました。建設はブル

ノのモーリッツとアルトゥール・アイスラー兄弟の建設会社によって実施されました。

ルートヴィヒ・ミース・ファン・デル・ローエ (1886年3月29日アーヘン〜1969年8月17日シカゴ) は、父親の石工で職業訓練を受けました。1905年から1907年までブルーノ・パウルのアトリエで描画家として活動し、1908年から1911年までペーター・ペーレンスの下で建築家として働いていました。1913年に彼はベルリンに自身の建築事務所を開設しました。1928年にバルセロナで開催された万国博覧会のドイツパビリオンを設計しました。1930年から1933年にかけて、彼はパウハウスの最後の店長でした。1938年に彼は米国に移住し、シカゴに自身の設計事務所を設立しました。

リリー・ライヒ (1885年6月16日ベルリン〜1947年12月14日ベルリン) はお針子として訓練を受け、1908年にウィーン工房のヨーゼフ・ホフマンの工房に入りました。1912年に彼女は工作連盟の会員となりました。1924年から1926年まで、彼はフランクフルトの展示会部門で働いていました。ここで彼女とミース・ファン・デル・ローエとの運命的な出会いが起こりました。彼らは生活および仕事上のパートナーとなり、その後の10年間で展示会やインテリアのアーキテクチャルな解決策を共同で設計しました。両名は1929年のバルセロナ万国博覧会でドイツの展示の指導に任命されました。そこで、リリー・ライヒがドイツ館のインテリアにも関わりました。1932年から1933年にかけて、彼女はパウハウスで織物工房と建築部門の責任者として活動しましたが、ナチスによる学校の閉鎖までです。

3階

上部テラス (A)

入口には、通りに面したテラスが2つのレベルにあります。入口のレベルは歩道にスムーズに接続しており、南東側の低いレベルは建物の技術的設備のために使用され、ここにはコークスの排出口、ごみ用エレベーター、および空調用の開口部があります。メインと従業員エリアの間にある広い屋根付き通路は、元々単純な手すりでの閉鎖されていましたが、それを通して、シュビルベルク城を見下ろすテラスの後ろに行くことができます。

親セクション (C)

両親の浴室

フリッツさんとグレタさんの部屋の間の小さな廊下から、トイレとバスルームにアクセスできます。部屋の照明は、天窓と通気窓を介して確保されています。廊下には、クリーム色の靴箱と衣類収納があります。

フリッツ・トゥーゲントハットの部屋

部屋は寝室と仕事部屋の機能を満たしています。壁沿いには、元の組み込みのバリサンダーの板が付いたクローゼットがあり、クローゼットの内側にはメイプルの木が使用されています。キャビネットの壁の前にベッドが置かれています。窓に垂直には、肘掛けのない2つのシュトゥットガルト型の椅子 (MR 10) が付いた書き物机があります。机の後ろの壁には、低い本棚が配置されており、その上には元々エミール・トゥゲンダット、すなわちフリッツの父親の絵がかかっていた。床は、DLW (Deutsche Linoleum Werke) ブランドのクリーム色のリノリウムで、すべての部屋とメインの居住スペースの床に敷かれています。この材料は、建築家が床を一律で色彩的に中立の表面として見せるために選んだものです。インテリアは2枚の東洋製絨毯で仕上げられています。

グレタ・トゥーゲントハットの部屋

部屋は寝室と女性用ドレッシングルームの機能を組み合わせています。壁沿いには、バリサンダーの貼り板が付いた元の組み込みクローゼットがあります。ベッドは窓に対して配置され、窓の下には小さなソファがあります。ソファの横には、天井照明と化粧台が付いた鏡が掛けられており、鏡の前にはバルセロナチェアが置かれています。座席には、チェリーレッドのレザー張りのフレーム付きブルノチェアと、スチールチューブ製の丸いテーブルが使われています。床には白い羊毛の絨毯が敷かれています。窓の向かい側、組み込みクローゼットの壁には、ガブリエラが直接小さな廊下を通して男の子の部屋に入ることができるドアがあります。

この階の従業員エリアは、ガレージの後ろにあるアパートで構成されており、元々は運転手と管理人が住んでいました。今日、このエリアは別荘の施設として使用されています。ガレージは、当時の建築規制に反して、家の境界線まで広がる敷地全体を利用していました。

テラスは、保育士の部屋を除くすべての部屋からアクセスできます。グレタ・トゥゲンダットは、子供たちがテラスに水の入ったバケツ、砂の箱、そして自分の車で遊んでいたことを思い出しています。パーゴラは緑で覆われ、曲線を描くベンチの手すりにはつる性のバラが絡みついていました。

テラスの支柱の銅板の外装は、メインの居住スペースと同様にクロムメッキされていませんが、代わりにブロンズ色を持つように人工的にパティナを施されています。テラスの南東側のファサードの元の表面が露出している所には、いわゆる考古学的窓 (約1㎡) が見えます。

上のテラスからは、ブルノの歴史的なパノラマが美しい景色として広がります。その景色は、ブルノの象徴的な建造物であるシュビルベルク城と聖ペトロ・パウロ大聖堂によって両側に囲まれています。ロウ＝ビール別荘、すなわちグレタの親の家は、ドロブニエ街に面した敷地の下部に位置しています。隣接する庭園の西側には、アーノルド別荘とギスクロヴァ別荘の屋根が透けて見えます。これらは、ブルノで最も古いヴィラ地区であるルジャンキの斜面に1860年に建てられた最初のヴィラコロニーの建物です。グレタ・トゥゲンダットのおばであるツェツィーリエ・ホーゼが、建築家ヨゼフ・アルノルトの別荘を1909年から所有していました。

庭園

この庭園は、ブルノの庭園建築家マルゲータ・ミュレロヴァーと協力してミースによって設計されました。その庭園はベント・リーレ (強調された空虚) の概念に基づいて計画された草地が特徴であり、そこが支配的な要素となっています。夏の休憩場所は、居住空間の食堂と軸を合わせて配置されていました。現在のロウ＝ビール別荘の庭には、庭師の小屋が建っています。両家の庭園は、常に地理的な一体感を形成しており、建築的な一体感ではありませんでした。

子供セクション (D)

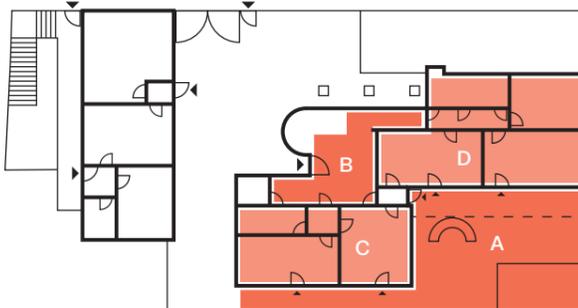
子供の部屋

少年のエルンストとヘルベルトの部屋には、おそらくヤン・ヴァニェックのSBS会社で作られた、シンプルなワニス塗りの子供用家具が備え付けられています。クリーム白色のデザインの家具の表面処理は、シンクが組み込まれているドアウイングと作り付けキャビネットの塗装に対応しています。男の子の部屋は引き戸で長女のハンナの部屋とつながることができます。

ハンナの部屋の家具は、ミースガリリー・ライヒと協力して設計したものです。家具のクリーム色の塗装は、ドアと組み込みクローゼットの塗装と一致しており、そこには洗面台が組み込まれています。ハンナの部屋には2つのベッドがあり、子供たちが病気のとときや訪問者が泊まる場合に、保育士が泊まることができました。その部屋は客室としても使われました。

家庭教師の部屋

南西向きの窓がない唯一のリビングルームです。入り口の左側には、ゼブラの木で貼られた組み込みのクローゼットがあり、内部には隠れた洗面台があります。クローゼットの前にはベッドがあり、窓の近くには長方形の書き物机とシュトゥットガルトの椅子があり、くつろぎのためにトゥゲンダットのアームチェアがあります。ベッドに対面する壁沿いには、低い本棚と収納棚があります。床には東洋製絨毯が敷かれています。廊下から共用浴室に入ることができます。



A - 上部テラス
B - エントランスホール
C - 親セクション
D - 子供セクション

家と庭の“コミュニケーション”には、いくつかの決定的な瞬間があります。上のテラスや寝室の窓から眺めると、ブルノのパノラマが見え、別荘と街が結びついています。メインの居住スペースから見ると、街の個々の建物の優位性や緑地の親密さが見え、周囲の自然との結びつきが感じられます。庭から見ると、木々や建物の外壁に植えられた植物があり、建物が緑の中に「溶け込む」光景を引き起こします。家の北西側にはハーブ園があります。

エントランスホール (B)

メインの入り口は、牛乳色の曲面ガラスの壁の後ろにあり、風よけの位置に配置されています。片側からもう片側まで、一枚のドアにはバリサンダーの貼り板が付いています。入り口のドアは、部屋全体の明るい高さを占めており、他の居住スペースへのすべてのドアと同様に、部屋の通常の高さに合わせています (補助スペースへのドアは通常の高さです)。グレタ・トゥゲンダットが述べたように、ミースはドアや窓を壁の穴としてではなく、建物の一部として考えていました。ドアの高さは、自由に流れる開放的な空間の属性の一つであり、床と天井に制限される水平線を排除します。入り口の反対側にはローズウッド突板の壁と、テラスに出ることができる小さな前室へのドアがあります。壁には、元の家具のレプリカが並んでおり、丸いテーブル (MR 140) と肘掛けの付いた2つのシュトゥットガルト型の椅子 (MR 20) があります。右側に親セクションの入り口と鏡のある更衣室があります。

チェルノボル二通りの向かい側からは、半透明のガラスで覆われた丸い壁がホールを照らしています。ガラスの表面は外側が光沢があり、内側がマットです。。床とらせん階段にはイタリア産のトラヴェルティンが使用されています。壁と天井の仕上げは、磨かれたスタッコ・ルストロ (光沢のあるスタッコ) で形成されています。支柱は真鍮板で覆われており、手すりと同様にクロムメッキされています。この解決策は、メインの居住スペースにも見られます。

地上2階

メインのリビングエリア (E)

メインの居住スペースへの入り口は、玄関ホールから一腕式の部分的に曲がった階段を下りて小さなロビーに至ります。前室からガラスドアを通してメインのリビングエリアに入ります。

ヴィラの鋼鉄骨組みは、いわゆるフリーフロー空間の自由な変化を可能にし、各機能ゾーンはオニキスの直線とマカサールの曲線、鋼鉄製の柱の規則的なリズム、家具の配置によって示されます。可変的な空間の連結と封鎖は、数枚の黒とクリーム色のシャンタンシルクとベルベットのカーテンを使用して達成されました。

オリジナルの素材はリビングエリアの重要な部分を占めています。完全に例外的な装飾的であると同時に機能的な要素は、いわゆるオニキスの隔壁です。白い模様のある蜂蜜黄色の石で、モロッコのアトラス山脈で採石されました。この宝石のような建物は、冬の晴れた日に特別な能力を発揮します。夕日の光が壁を透過し、その壁の色彩を変化させます。

ダイニングスペースは、マカサルエゴニーの木目が施された丸みを帯びた仕切りによって区切られ、寛大なダイニングテーブルを囲んでいます。元の隔壁はすでに1940年に内部から撤去されました。歴史家のミロスラフ・アンブロゾにより、2011年にブルノのマサリク大学法学部の食堂で壁の装飾として再利用されていることが発見されました。2012年の文化財修復プロジェクトにおいて、熟練した職人の努力により、この本物の要素が元の位置に復元されました。

丸い食卓は、元の設計に基づいて製作された正確なレプリカです。テーブルは、黒光沢のある梨の木で飾られており、3つの異なるサイズで利用することができます。テーブルの天板は、鋼鉄の脚に支えられており、この脚は同じプロファイルと外装を持っています。これは、主要な柱と同じデザインです。

その独特の構造と美学は、時代を超えたいくつかの技術的要素で補完されています。例えば、主居住スペース全体で利用されている空調システムは、空気の暖房、ろ過、および冷却に活用されています。同様に、食堂の大型窓やオニキスの仕切りの前に完全に

埋め込むことができるシステムもまた、非常に時代を超えたものです。窓のそばには、中央暖房のクロムメッキのレジスターがあり、窓ガラス上の湿気を防ぎます。ほとんどすべてのこれらの要素は、元の状態で保存されており、今日でも機能しています。

同様に重要なのは、居住スペースにおける独立した家具の一部です。この点において、南西の壁にあるオニキスの仕切りの前に座ることができるようになっています。庭園を眺めながらくつろげます。このセクションでは、次の物が確認できます：

- ・ ルビーレッド色の安楽椅子 (MR 100)、
- ・ シルバーグレー色の織物カバー付きの3つのトゥーゲントハットアームチェア (MR 70)、
- ・ エメラルドグリーン色の革付きの3つのバルセロナアームチェアとスツール (MR 90)。

座る所の後ろには、ドイツの彫刻家ヴィルヘルム・レームブルックによる歩くトルソーの彫刻のレプリカがあります。居住スペースでは、ブルノチェア (MR 50) の存在も言及できません。これらは、チューブスチール製で、例えばダイニングテーブルの周りに白い羊皮紙で覆われています。

オニキスの隔壁の前には、リューベック (ドイツ) のアレク・ミューラー・ヘルヴィツヒによって手織りされた、明るい天然羊毛で作られた絨毯がありました。オニキスの仕切りの後ろには、ルーベックで手織りされた茶色の天然ウールのカーペットが敷かれました。これは、1934年にオリエンタルの絨毯の1つを取り替えるために補完されました。

食事の準備室 (F)

主居住スペースとキッチンの間には、調理室が配置されています。準備室からは鋼鉄製の螺旋階段を下りて技術階にアクセスできます。調理室には、食食用エレベーターも設置されており、すべてのピラの3階を接続しています。エレベーターシャフトとキッチンの間には、食器用の埋め込み式のキャビネットとその後ろに食料品室が組み込まれています。大きな窓の前には高い仮置きテーブルが2つありました。

窓を下げるための機械室

(K) 長いツアーの部分

大型 (約5×3メートル) の窓ガラスを下げる装置の保存は世界的にも非常に珍しいです。1980年代の再建中に設置された2台の電気モーターによって下げられます。2010年から2012年にかけて行われた建物の2回目の修復の一環として、システムは完全に修復されました。グレタさんの回想によると、家族は冬の晴れた日でもよくこの機構を使いました。

展示：書店 (L)

元々、このスペースは洗濯物の乾燥室やアイロン掛け部屋として使用され、隣接する果物や野菜の貯蔵庫と、食料品用のエレベーターがありました。現在、展示会とビジターセンター (書店) があります。

雨水貯留槽

(M) アクセス不可

元々果物や野菜の貯蔵庫だったスペースの後部には、庭の洗濯と灌漑用に使用されていた元の鋼鉄製の雨水タンクが保存されています。

洗濯室、暗室、衣蝶室

(N) 長いツアーの部分

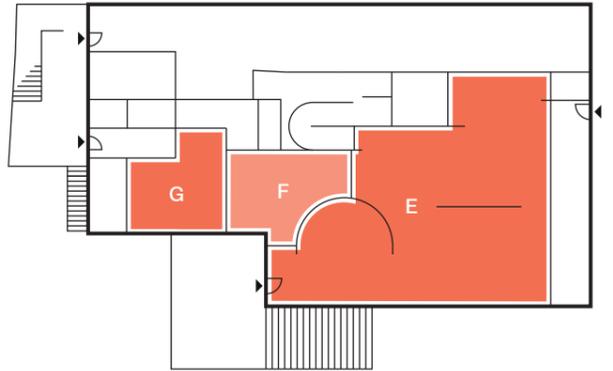
書店の裏に洗濯室があり、その裏に暗室があります。フリッツ・トゥゲンダートが写真を現像していた暗室は、地面のくぼみにあるため、入り口のテラスに向かって排気する垂直通気システムで換気されています。元の設備は何も残っておらず、時代の要素である示唆的な展示物で装備されています。

冬の衣類を保管するために、元の計画では「モッテンカンマー」として記述されていた部屋が利用されていました。部屋は、壁や天井に本物のベルニナの仕上げ、わずかに暗いセラミックタイル、そしてハンガーバーが備わるなど、元の状態で保存されています。

台所 (G)

台所のレイアウトはリビングエリアとスタッフエリアを接続します。スタッフエリアからの入り口のそばにはガスコンロがあったらしいです。窓の下と壁に沿ってキッチンキャビネットがあります。反対側のコーナーには、木製の正方形のキッチンテーブルがあり、4つのシンプルなラッカー塗装の木製の椅子が置かれていました。テーブルの向かい側には、組み込み式のクリーム色のキャビネットがあり、食料品室を区切っています。キッチンの壁は天井まで象牙色のタイルで覆われており、床にはRAKOブランドのやや濃い目のセラミックタイルが敷かれています。キッチンや食事の準備室では、この部分にある主要な柱の色合いが変わり、クリーム色に塗装されているのが見られます。

2階のスタッフエリアには、料理人とメイドの部屋がありました。現在、部屋はセキュリティと別荘の学習および文書化センターのスペースとして使用されています。



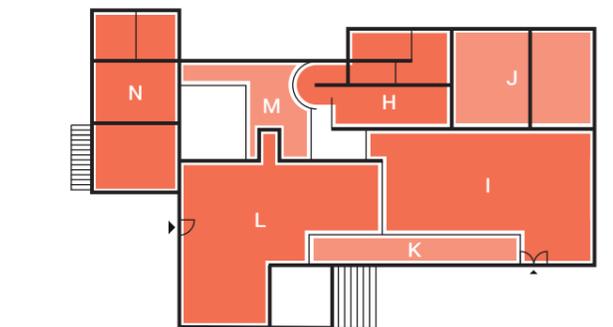
E - メインのリビングエリア F - 食事の準備室 G - 台所

1階

空調機械室

(H) 長いツアーの部分

空調調和室のセットは、空気の処理とその家の配布を確保します。調節には、手で空気の量、品質、および循環を設定するためのモバイルクリック付きのシンプルなパネルが使用されます。



H - 空調機械室 L - 展示：書店
I - 展示：講堂 M - 雨水貯留槽
J - ボイラー室とコークス貯蔵庫 N - 洗濯室、暗室、衣蝶室
K - 窓を下げるための機械室

1938年以降のトゥーゲントハット家について

ユダヤ人のトゥーゲントハット家は、自分の家に8年しか住めませんでした。チェコスロバキアにおけるナショナル・ソーシャリストとその支持者からの脅威を認識していました。ナチスの軍隊によるオーストリア併合後、1938年3月12日に亡命し、まずスイス、その後1941年1月にカラカス (ベネズエラ) に移住しました。フリッツ・トゥゲンダートは、チェコスロバキア全土が1939年3月にドイツのヴェアマハトによって占領される前に、いくつかの家具や設備を亡命先に持ち出しました。一部の家族のメンバーは亡命せず、ナチによって殺害されました。2017年、ブルノ市と市民活動団体「ミーティング・ブルノ」の招待で、レーブ・ベア家、シュティアス二家、トゥーゲントハット家のメンバーが100人以上ブルノを訪れました。グレタ・トゥーゲントハットの娘2人、孫12人、ひ孫19人は現在、カナダ、米国、ドイツ、スイス、オーストリアに住んでいます。

→ WWW.VILATUGENDHAT.CZ FB IG @VILLATUGENDHAT

#HRADSPILBERK #ARNOLDOVAVILA #MENINSKABRANA

MMZ Villa Muzeum
Tugendhat města Brna

空気は底に塩の石が置いてある特別なシャワー室で冷却され、加湿されます。これらの石には、縦方向の水道管に設置されたノズルから水が落ちてきます。濾過は、時計駆動の回転式オイルフィルターと、油の留分を捕捉する木材詰めフィルターによって行われます。空気の加熱には1台の熱風交換器が使用されます。

空気循環は、1942年製のSVETブランドのモーターを搭載した電動ラジアルファンによって確保されます。換気扇は、基礎構造への振動の伝達を防ぐコルク製の間仕切りを備えたコンクリートの台座に取り付けられています。

空調システムは部分的な詳細部を除いて本物の状態で保存されており、完全に機能します。

展示：講堂 (I)

元々は庭用の家具を保管するスペースでした。現在、それは建物の歴史、住人、建設者、および建築家についての常設展示に使用されています。このスペースは、講義、専門セミナー、短期展示会の講堂として定期的に使用されます。

ボイラー室とコークス貯蔵庫

(J) 長いツアーの部分

80年代に行われた別荘の最初のリノベーションでは、コークスボイラー室が市営の地域熱供給システムに接続された熱交換ステーションに変換されました。元の技術で唯一残っている要素は灰用エレベーターです。最近の保存修復作業では、Strebelブランドのリファビッシュされた2台の歴史的なコークボイラーと、バスルーム用の温水を加熱するための1台のボイラーが、元の場所に取り付けられました。ボイラー室の隣には、保存された元のコークス排出口があるコークスの貯蔵庫があり、黒いセラミックで内装されています。